
Tenebroso Luce

暁 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T e n e b r o s o L u c e

【Nコード】

N 3 3 4 9 F

【作者名】

暁 琥珀

【あらすじ】

ある日、久しぶりにポストを開けたら、不幸の手紙が入っていた・・・。主人公、烈火は高校に入った時から、親元を離れ、一人でアパートに暮らしていた。いたって普通の毎日が、一通の手紙によって、破壊される破目になるなんて、思いもしなかった・・・。

ブローグ

ここは、どこだ？

暗く、冷たい、泥沼に落ちたような感覚。

『才願イ。』

女の子の泣く声。

誰？

俺は、どうしてここに居るんだ？

『彼方ハココへ来テハナラナカッタ。』
『

『彼方ハコノ世界カラ選バレタ人。』

なんだ？

この声。

なにか、大切なことを忘れている気がする。

すっごく大切な……何か、を。

『死ナナイデ。』

死んでたまるかよ。

俺はまだ、16なんだ。

これからが、人生の本番なんだ。

第一、何で死ななきゃならないんだ。

俺の人生だ。俺が決める。

『駄目。』

何が？

『コッチノ世界ニ来タラ彼方ハ死ンジャウ。』

じゃあ、行きやしないよ。

『デモ彼方ハコツチニ来テシマウ。』

ヤダよ。

いったら死ぬなんて。

「アルシルイスが決メテシマッタカラ。」
↳

アルシルイス？

誰だ、それ。

とゆうか、君は誰？

私
八
・
・
・
・
・
・
○

一日目 不幸の手紙

「・・・。」

『これは彼方への忠告書です。』

これが、この手紙の初めだった。

『彼方は、もうじき死にます。』

『死にたくなければ、こちらの世界へと入らせて下さい。』

・・・。

今時、低レベルな不幸の手紙だ。

俺は烈火。^{レツカ}

こんな、かつこよそうな名前でも、見た目はもちろん、頭が特別いいわけではないし、スポーツが最高に得意なことも無い。頭の髪は、普通に黒くて、親からの遺伝でちょっと猫っ毛。ひょろっと、背が高いわけでもなければ、小さくて丸いって訳でもない。

つまり、どこにでも居そうな16歳の少年だ。

で、今は高校に通ってて、親元を離れて暮らしてる。ちよつと、訳ありでさ。

親父の古い友達が貸してくれている、なんとなく古い一軒家に住んでいる。

気がむいて、新聞やらチラシやらが詰め込まれた、ポストを開けてでて来たのがこれだ。

別に、何日までに何人に同じ手紙を渡せって書いていることも無いが、

死ぬって、何だよ。

まだまだこれからだぜ？俺。

『短い人生を楽しく暮らすか、あるいはこちらの世界で生き抜くか。』

『一生に一度の命の選択です。』

『彼方が決めてください。』

『こちらの世界へと来るならば、次の満月の夜、使いを出しましう。』

『こなければ、次の満月の夜、彼方は死ぬでしょう。』

『では、間違った選択をしないように、祈ります。』

文字自体は、ふざけては見えなかった。

誰が書いたのかは知らないが、見たことの無いくらい綺麗な字だった。

筆で書いたのではなく、鉛筆で書いたわけでもなく、なんとも不思議な文字だった。

でも、文は馬鹿げてる。

こちらの世界やら、使いを出すやら。

まるでファンタジーじゃないか。

16にもなった俺が、こんなこと、信じられるわけが無い。むしろ、信じたくない。

でも、これがマジだったら・・・？

って、考えすぎか。

こんな手紙に、マジになっちゃ、絶対ならん。

次の満月は・・・。

いつだったかな？

確か、月カレンダーがあつたっけ？

と、がさごそとあさってみると、意外と簡単に見つけることが出来た。

「て、明日じゃねーかよ。」

今日は、10月3日。

4日の場所に、丸い形が描かれていた。

今時、こんな偶然があるだろうか。

もうちょい、マシな偶然にしてほしい。

「んー。ま、明日になればわかるか。」

今はもう11時過ぎだ。

明日は日曜。

今しか眠れる時間は無い。

俺は軽くお茶漬けを食べた後、

すぐさま布団にもぐりこんだ。

ずっと干していないからか、少しカビ臭かった。

今を生きるか、向こうで生きるか。

短い人生を楽しむつつあって、明日だから一日しかない。

何をしろってゆうんだ。

大体、こんなことを考えてる俺って・・・。

手紙は、枕元においた。

捨てるにも、捨てられない。

そして、眠るにも眠れなかった。

二日目 真っ白な空間

『・・・ココへ、来テハイケナイ。』

また、あの声だ。

『・・・来テシマッタラ、死ンデシマウ。』

だから、死ぬんだったら、誰も行かないよ。

『・・・彼方ヲ、死ナセタク無イ。』

真っ白な、何も見えない空間。

俺自身見えないくらいの眩さ。

体はあるのか無いのかも判らないほど軽い。

そして、この子の声。

鈴を転がすような、綺麗で可愛い声。

幼い、女の子の声。

君は、誰なんだ？

そんで、俺は何でここにいるんだ？

『・・・ココハ、死^{ティナルノティス}ノ無イ世界。』

『・・・ココニ、死ガ生マレヨウトシテイル。』

『・・・死ガ生マレタラ、私達ハ皆消エル。』

・・・別の声。

老人みたいなしわがれた声と、

小さな男の子の声。

死の無い世界・・・か。

あつたらいいけど、何もやること無いしな

・・・少なくとも、今の俺には。

□
・ ・ ・ 彼方へ、選バレタ人。
□

また別の声。

美しい、大人の声だった。

・
・
・
で、
何に？

生贄^{リノス}ニ。

三日目 ホコリにまみれた本

「うわぁわぁあああ!？」

飛び起きると同時に、布団を蹴散らす。

なんだよ、今の夢!?

り、生贄^{リノス}・・・!?

俺が・・・!?

だから、おれはまだ16だつてのっ!
なんだか判らない、生贄になんてなつてたまるかよっ。

・・・て、

なに俺つてば、焦つてんだ?

夢だ。夢になにムキになつてんだよ。

ば、馬鹿馬鹿しいっつの・・・。

・・・。。。

そうだ。

夢に決まつてる。

何が起こつたわけじゃないし。

第一、正夢になる確率なんて、低い。

さらに、俺は元から夢を見にくい体質なんだ。

たまに見た夢が・・・しかもこんな悪夢に等しい夢が、
・・・正夢になつてたまるかよ。

「あ、そうだ。」

手紙をもう一回、読み直してみよう。

なにか、間違っていたのかもしれない。

眠かったし、意識もボォーっとしてたから……

「な……。」

……無い。

……んでだよ。

さっきまで、ここにあったはずなのに。

別に誰かが入った、形跡もないし。

……消えたよ。おい。

もしかして、寝ているときにどっかに蹴飛ばしたか？

布団の下には無いしなあ。

ぐ、偶然だよな。

悩んでたって、しょうがない。

今日は久々の休みなんだ。

遊ぶっ！

あの夢のことは、忘れるんだ。

忘れるんだよ、俺。

「っさて。」

今日の朝飯は、おにぎり一つ。
で、そんなの誰も聞いていない。

茶色いウエストバックに、財布とハンカチを詰めた。

あとは、テキトーに何か入ってる。

ちなみに、説明していると、頭が痛くなるものばかりだ。

母親に、「女の子じゃないんだから。」とも、言われたことがある。
まあ、それで中身はご想像していただきたい。

「でも、どいこっかな。」

別に、誰と遊ぶ約束してたわけじゃないし。」

ドアに鍵をかけた。

窓は・・・閉めたよな。

鍵は持ち歩かない主義の俺。

いつもは、裏庭にあるパイプに引っ掛けた、傘の中に入れている。

でも、今日はカバンの外ポケットに突っ込んだ。

・・・

なんでこんなことしてんだよ。俺。

今日でこの家とおさらばで、泥棒に入られないように持って行く訳じゃないんだし。

「……。」

ま、いつか。

気分だよ。気分。

多分、無意識に持っっていこうとしたんだ。
だよな。

そのまま俺は、近くの本屋に行った。

いつもここで時間をつぶしてる。

このオヤジは、立ち読みしても起こらない。

……『年』だからだろうか。

何を読もうかと、うろろろしていると、

目の前に、小さな女の子が通った。

赤いリボンを髪につけている、幼くかわいい子。

……決して、ロリコンではない。

走って通り過ぎたもんだから、一瞬しか見えなかったけど。

ここで親と離れるのも、珍しい。

だって、本棚が所狭しとあるために、立っていられる場所は少ない。
逸れたなら、簡単に見つかるはずだ。

でも、焦っているようにも見えなかったしな……。

で、なに考えてんだよ俺。

どうでもいいじゃんか、他人のことなんて
しかも小さな子供相手に。

「お・・・？」

面白そうな本を見つけた。

何も書いていない、背表紙。

赤い背景に、金の縁取り。

表紙にも何も書いていないが。

どことなく、不思議な感じのする本。

・・・こんなのであったっけか？

てか、今時こんな素朴な本、見たことねえよ。
パラパラと、開いてみる。

・・・何も書いてねえ・・・。

ほりかぶって、こんな所にあるなんて、

面白い本だな・・・。

作者に用意されておいて、何もかれずに出されたっけか。

・・・あはは。

ちょっと気に入った。

ええっと、値段は・・・。

『-----
万（税抜き）』

はあ！？

なんだよ！この値段！！

しかも税抜きかよっ！

買えねえよ、こんなの。

「ふむ。その本を見つけたか。」

「うわあっ！？」

お店のオヤジさん！

びっくりした……。

存在感ねえな……。

……と、オヤジさんは値段のシールをベリッとはがした。

「もってけ。この本はあんたんだ。」

「……は……？」

それだけ言っと、オヤジさんは店の奥へ、戻っていった。

何だったんだ？

貰ってもいいのかよ。

こんな高い本……。

本はやっぱりホコリだらけだった。

不思議で、なんとなく恐ろしくも感じた。

四日目 小さな女の子

・・・あまりの出来事に、昨日の夜のことを忘れた俺が馬鹿だった。

俺は埃を払った本を、バックの中に入れた。

案外、小さかったし・・・。

問題は時間だ。

だいぶ長く立っていた気がするからな・・・

「・・・って、もう夜かよ!？」

油を注せばいいのに、と思うほどがたついてる扉を超えれば、空の色は、黒に近い、深い藍色だった。

そして、その空には満月が、不気味に赤く、輝いていた。そんなにいたっけなあ・・・。

「さて、コンビニによって弁当でもかおっかな？」

今日はそんな気分だ。

家に帰って、米とぎしておかず作って食器をならべて・・・なんて今の気分じゃ、やる気も失せる。

というにも、暗くなりかけた空を照らす、商店街の光は、あまりにも少なすぎた。

みんな、店を閉じていくからだ。

代わりに、消えてはつき、ついては消える繰り返し、ボロい電灯

だけが残る。

・・・無理だな。

どうせ暗いなら、裏の林を通っていった方が断然速い。
真っ直ぐ抜けられる。

本屋の裏に回り、林に足を入れ込んだ時だった。

「…………彼方は此処へ来てはなかった。」

小さな声にハッとし、振り向いた。
入ってきたばかりのはずなのに、そこに古びた店はなかった。
一歩しか、入ってねえぞ…………？
で、いまなんて…………。

「…………でも彼方は来てしまった。」

聞き覚えのある言葉…………。
この声、聞いたことがある…………。
…………夢…………。

夢で聞いた言葉だ。

夢で聞いた声だ。

ここ、夢じゃないはずだ。

それなのに、なんで、聞こえる？

ふと、視線を感じ、また後ろを向いた。

・・・小さな女の子が立っていた。

本屋で見かけた、あの小さな子・・・。

5、7歳くらいに見えるその子は、

夜空にも負けないほどの、黒い髪。

肩にかかる長さの髪を、少し取って赤いリボンで結び、

耳の近くには、やはり赤色のピンが二つづつ、両方についていた。

ルビーのように輝く瞳を、夜空に浮かせている。

小柄な体には、淡い赤のワンピースを着ていて、小さなリボンが見事に合っていた。

可愛い女の子だ。

だけど、腕を後ろで組み、俺をじっと見ているこの子は、まるで人とは違う感じがした。

・・・なんだ、この子？

まず、店が見えなくなってしまうただけで、俺は混乱した。

タダでさえ何か可笑しいのに、こんな小さな子まで迷ってしまったているのなら、これほど厄介なことはない。

「君の親は？迷子？」

少女は俺の問いには答えなかった。

平然とした顔で、少女は言った。

「私は迷子じゃない。
むしろ、彼方の方が迷子じゃない。」

ドキッとした。

この子の話し方、まるで大人じゃないか。
状況の理解が速すぎる。

そんで、この子の声……。

あの声とそっくりだった。

まさか、夢の中の声？

ま、まさかなあ……。

「なんでそうなるのよ。」

あはっ。

なんだよ、その言い方。

まるで、自分がそうかのように……。

「そうなんだけど。」

「信じられる訳ねーだろっ！」

つい怒鳴った。

だって、そんなことがあるはずがない。

あの夢は、俺が生贄になるような夢だった。

それが、正夢になる訳……。

「正夢になるとしたら……？」

怒鳴られたにも関わらず、無表情で少女は言った。
何を言えればいいんだ……。

・・・ここ、現実だよな・・・。

「彼方は生贄^{リノス}に選ばれた。

私は、そこまでついていくお供みたいなもので、どうする？

此処に残れば、彼方はここから出られずに、ここで死ぬ。
^{ティナルノフェイス}死の無い世界に来て、生贄^{リノス}として生きる。

…どちらでも彼方は結局死ぬんだね。

どうする？

彼方が決めてもいいの。

本来なら、強制的に連れてかなきゃならないんだけど、私が担当だから、まだ時間がある。

でも、早くしないとやっぱ強制的に連れてかなきゃならないの。

」

ここは、現実だよな・・・？

夢って、正夢になること、少ないんだよな・・・？

じゃあ、これは夢・・・？

試しに、頬つぺたを抓ってみた。

・・・痛い。

痛みのある夢も、あつたんだな。

「…まだ、信じられない？

もう時間が無いのに。」

少女は少し、悲しげな顔をした。

リアルな夢だ。

でも、これが、・・・本当だったら・・・？

此処で死ぬか、

向こうで生きるか？

急に人生の選択かよ。

でも、此処で死ぬよりは……。

「…『むこうで生きる方がマシ。』」

「！」

「…でしょ？」

そうだった。

ここで16年を終わらすよりは、まだまだ。

でも、生贄になったとして、何年生きられるかなんてわかりやしない。

いつてすぐ、死んでしまいかも知れない。

でも……。

「……こんなところで、死んでなんかいられるかよ。」

ぼそつと言った言葉に、少女は反応した。

「うん。私もそれがいいと思う。」

向こうで生きているのは、此処より辛いけど……。

……は？

なんだと？

「じゃあ、扉を開くよ。」

少女が空に手をかざすと、星は集まって一つの光になり、

月は、赤い光を飛ばして、黒い輝きを發した。
星の光はやがて、一筋の道になり、
月の扉は、黒い穴となって、浮かび上がった。

「ちよつと待つ・・・！」

俺の言葉は、全部言い終わらぬうちに、
暗闇に吸い込まれてしまった。

五目 異世界と音羽

…目が覚めたら、そこは見知らぬところだった。

・・・なんてのが、ファンタジーの始まりだ。
でも、まさか、ホントにこんな所にくるとは・・・。

目の前が真っ暗になり、次に目を開けた時には、
俺の前に、鬱蒼とした木々はなかった。

暗い夜だったはずの場所は、いまやその欠片さえ、残してはいない。
といっても、陽が昇っているわけではなく、何故明るいのかは不明
だった。

この景色を見て、口を開かない人なんて、まずいないだろう・・・。

「・・・俺、完全に頭イカれたのか？」

「馬鹿ね。そんな訳無いじゃない。」

気が付けば、目の前にあの子がいた。
少女は続けた。

「ここは、死の無い世界への入り口と狭間、
テイルスラバ
楽園への扉なの。」

「下手に行動しないでね。
一生出られなくなるから。」

その声は、見た目と違ってものすごく大人びていた。
そんで、なんとなく恐ろしかった。

「・・・てか、君の名前は？」

「あ、言っていなかったっけ。私。」

言っていない。

夢の中で、言う途中で目が覚めたんだ。
判るわけがない。

「私の名前は、音羽^{ネウ}。
幼く見えると思うけど、彼方よりは生きてるはずだから。」

「だって、死の無い世界だろ？」

「死ななくても年は取るよ。」

無表情で音羽は言った。

「・・・とゆうか、その見た目で俺より生きてるって言われても・・・」

信じるに信じられん。

「で・・・えと音羽さん？」

「音羽。」

間髪いれずに音羽はいった。
ちよつと二ガテだなあ、こつゆつ。

「俺、結局死ぬのか？」

俺は、かなり真面目だった。
こんなわけの判らんとところで、この世を去るのもじれたい。
夢なら覚めてほしいくらいだ。

「このままだったらね。」

でも、彼方の行動次第で、元の世界に戻れないことも無いの。」

その言葉に、固まる俺。

「『戻れないことも無い』・・・帰られるのか？」

「確率は1%」

・・・。

少なつ。

そのまま音羽は、続けた。

「今の状態だと、だよ。」

確立を増やすのは、単に運だけね。多分。」

服の砂を掃いながら言った。

「…あの方に会えたら、100%うまくいく。」

「あの方って誰だよ!？」

いるのかよ、そんな人。

会うだけで帰られるのなら、絶対に会ってやる!

「無理よ。」

弾む心に、氷を入れる音羽。

どうゆうこと・・・だよ。

無理って言えるほど、遠いところにいるとか・・・?

「なんでだよ?」

ムツとして、聞き返したとき、音羽は歩き出した。

真っ直ぐ先の、上が見えないほどのデカイ扉に向かって。

途中振り返って、小さく言った。

「もう、死の無い世界には存在しないから。」

ティナルノテイス

それだけ言うと、また歩き出した。

死の無い世界に、存在しない?

単に俺が馬鹿なのか、どうなのかはともかく、

意味が判らない俺は、小さな少女のあとを、ただ追っていくことしか出来なかった。

六日目 暗闇の中の黒い光

音羽が扉の正面まで来ると、

ギギギッ…と鈍い音を立てて、扉は開いた。

・・・どうやって開いたんだ・・・？

こんなに高くて、重そうな扉・・・。

「…ここからが迷路の始まり。

逸れたら、その場で死ぬと思ってね。」

・・・はい？

め・・・迷路・・・？

んでもって、

逸れたら・・・死ぬ？

・・・。

・・・絶対離れるもんか。

「って、おい、待てよっ！」

始めっから置いてかれそうになった。

小さな音羽についていくこと数時間（？）

深い緑の森から、水の音がした。

・・・そういえば。

朝からずっと、何も飲んでなかったような・・・。

「・・・音羽？」

「なあに？」

幼くて可愛らしい声。

あのときの夢と一緒にの声・・・。

さっき聞いた、あの大人びた声は一体なんだったんだ？
俺の気のせいかな？

「水の音がするんだけど・・・。
飲んできてもいいかな？」

「死にたいの？彼方。」

間髪いれずにいわれた。

そついわれても、喉の渴きは限界なんですけどっ。

「あのねえ。最初にいったでしょう？」

私がいなければ、彼方は簡単に罠にはまる。

罠にはまるって事が、彼方にとっては死を意味するの。」

「どーゆうことだよ、つまりはよ。」

いらいらしてきた。

こんな小さな子供相手に・・・。

女の子相手に、俺の命守られてんだよ・・・。

死ぬとか死なないとか、正直言って意味わかんねえし。

・・・ここまでついてきてなんだけだよ。

「…呆れた。人間ってやつぱり理解が遅いのね。」

・・・なんですと？

・・・ははは。

・・・本気で馬鹿らしくなってきた。

・・・どうせ生贄で死ぬなら、今死んだって同じじゃないのか？

「・・・どうせ人間は馬鹿ですよ。」

お前がなんと言おうと、俺は行って来るからなっ。」

よし、言えた。

あとは音のするほうへ行くだけだ。

さすがにあそこまで言えば、音羽も俺を連れて行くの、嫌になるはずだ。

・・・だよな。

そのまま俺は真っ先に走った。
走れば余計に喉が渴く気もしたが、そんなこと言ってる場合じゃない。

下手すれば、脱水症状が起きる。
それこそ、死への第一歩としか思えない。
音羽が追ってきている気もしたけど、無視した。

・・・だけどおかしかった。

走れば走るほど、音は遠ざかっていった。
木々の色も、段々濃くなっていくし・・・。
徐々に徐々に、俺の周りは深い霧で囲まれていった。

完全に音が消えて、体力が尽きたときには、
俺の周りは、真っ暗だった。
視界がすべて、闇に遮断されたような感じだ。
なんとなく・・・ヤバイ感じもした。

・・・ふと、足元が軽くなった。

「・・・・・・・・っは!？」

現在、俺の足場は消えていた。

いや、正しく言うと、俺の足場だけ、穴ができたみたいに消えていた。

一言で言えば、・・・・・・・・あー・・・あれだ、ブラックホール。
俺のところにブラックホールができた・・・。

って、そんな問題じゃない。

少しずつ、俺の体は引きずり込まれていった。

少しずつ、少しずつ・・・。

その鈍さが、俺を混乱させた。

地面をつかもうと手を伸ばしたが、そこに地面はなかった。

木にでも掴まればと、腕を回したが、木はもう存在しなかった。
・・・それだった。

『あの木々』は、全て幻影だったのか、と。

暖かそうな太陽の光も、ざわめく葉の音も、
全て幻影だったと・・・思えた。

こんなファンタジーみたいなところだったら、ありえる話だ。

それともうひとつ。

俺は、もう死ぬのか。

短い人生だったな……。

彼女もできていないし、成績でトップを取ったこともなかったし。スポーツも失敗ばかりで、バイト先でもミスったりして……。

……うわ、最低だ。

思い出して損した……。

でも、別によかった。

そこまで遣り残したこともないし。

こんなところが最後なのは、ちょっと納得いかないが……。

そう思っているうちに、俺は暗闇に飲み込まれた。

目を開けても、何も見えない。

あ、あの夢に似ているな。

あの世界の黒色バージョン。

「ココデ彼方ヲ死ナセタリナンカサセナイ。」
□

・ ・ ・ 俺の目の前を、何かが舞った。
・ ・ ・ 黒い光だった。

七日目 ” 楽園への扉 ”

目の前は、もう闇じゃなかった。
色の無い世界になった変わりに、音羽がいた。

「・・・俺、死んだのか？」

「馬鹿ね。そんなわけ無いじゃない。」

なんとなく、聞いたことのあるような会話・・・
そっか、前にもあったな、似たような会話。

「全く・・・」

彼方のお蔭でまた一からやり直しになったじゃない。
レイフィル様になんて言えばいいのよ・・・」

「誰だよ、『れいふいる』って。」

「・・・馬鹿そんな発言ね。」

「悪かったなっ！」

出会った頃から変わらない、キツイ言い方。
こんな姿で、俺より年上・・・
駄目だ。頭がおかしくなる。

「レイフィル様は私が仕えている人。

アルシルイスが彼方を生贄にしたとき、彼方を助けようとした人よ。

あの方のご命令で、私は彼方についているの。

会ったら真っ先にお礼を申し上げることね。」

「ふうーん。」

・・・微妙だ。

生贄を助けようなんて・・・無謀にも程があるんじゃないか？
それに遣したのが「これ」だと・・・

・・・納得がいかない・・・。

それでもって相変わらず、喉の渴きは収まっていなかった。

厄介だな・・・。

死なない人はいいな。

どうせ何もしなくても生きていけるんだからな・・・。

「この様子じゃ、ゆっくり行く訳にはいかないみたい。

ちよつと厄介な人たちが来たから・・・。」

「は？」

おいおいおい・・・

いったい何が来たって言うんだよ・・・

怪物とか言っなよ・・・？

「…怪物とか…見た目によらず、子供みたいなこと考えるのね。」

「……見た目はお前の方が子供だ。」

「そんなこと…いまはどうでもいい。」

…来る…っ！」

音羽は、とつさに俺を背に庇うと、
あのでっかい扉……なんだっけ？『^{テイルスラバ}楽園への扉』？
それに向かつて飛び上がり、瞬時に扉を開いた。
ここまでで約15秒。

次に俺に向かつて手のひらを向け、なにかぶつぶつ呟いた。
ここで累計20秒。

音羽が何か言った次の瞬間、
俺の身体は宙に浮いて、音羽の隣に並んでいた。
ここで累計30秒。

……あの音羽がここまで急いでいる……。
何が来るって言うんだよ、一体……。

……って、ちょっと不安そうな、音羽の顔を横目で見た瞬間。
丁度、テイルスラバの反対方面から、大きな爆発音が響いた。

並みの爆発音じゃない……。

あの音じゃ、戦車50台分位はかるくいってるんじゃないかと思うくらい・・・。

・・・そして、どんくさい俺は、

見事に飛んできた破片（どうやら木の破片とかだったみたいだ）にぶつかり、

なんとなく音羽と、誰かが話しているのを、頭の片隅で認識し、巨大な扉が、別々の方向に倒れてる音をこれまた隅で確認し、

記憶にしまいこんだと思った所で、俺は気を失った。

八日目 赤色の夢

ふと、目が覚めた。

景色は一変。

真っ白な、太陽のない世界は嘘だったのかのように

・・・むしろ嘘だったのかもしれない。

町だ。

コンクリートのような材質の家、レンガでできた家。

賑わう街道、漂う人の体温。

体に貫くが如くの太陽の「光」

吹き抜けるが如くの風と、流れる雲。

可笑しい。

さっきまで俺は、超ファンタジーな世界で

俺より小さくて、俺より年上（自称）の「音羽」といたはずだ。

そっぴや・・・何かに当たって気を失ったんだっけ。

・・・我ながら「馬鹿」と叫びたい。

それはどうでもよくなった。

ここはどこだ。

音羽はどこだ。

俺はどうしたらいいんだ・・・。

「ふう…何とか逃げ切れたみたいね。」

・・・！？

「なによ…人が死んだような目で見ないでくれないかな…？」

「音羽・・・」

お前、何でここに・・・」

「何寝言言ってるのよ。」

あなたを護るようにならわれてきたのに、ここで私が先に消えるだなんて…悪いけれどまっぴらよ。

まだやりたいことだっていっぱいあるのに…」

そんな膨れっ面で名に言われてもな・・・

何もいえないじゃないか。

あれだな。

じつとしていればかわいい子供にしか見えないのにな、お前。

「お前：？何勝手に自分のほうが上のような呼びかたしてるのよ。
音羽と呼びなさい、音羽と。」

・・・はいはい。

ちなみに呼び捨てでいいのも微妙なんだが。

「お前、って名前で呼ばれないよか全然マシよ。
名前で呼ばないのは、相手を馬鹿にしている証拠。
知らなかったのなら覚えておきなさい。」

きつぱりと音羽は言って、俺に背を向けた。
そのまま人ごみをずんずん歩いていく。
どうやら怒らせてしまったようだ。

「・・・音羽？」

「なによ。」

細くて折れそうな脚を止めて、振り向く音羽。

「何怒ってるんだよ。」

「怒ってなんかいないわよ。」

「嘘だね。」

「嘘なんかついたことないわ。」

「今ついたじゃないか。」

「馬鹿なことを言わないでくれる?」

・・・。

会話レベルが低い。

年取ってる（自称）はずなのに、レベルが低すぎる。

・・・まさか。

まさか、こっちの会話にあわせてるなんてことは・・・ないよな？
格好つかないじゃないか。

「それより、水が飲みたいなら飲んでくればいいわ。

ここのなら平気よ、幻影じゃない。

…闇商店はあるけれど。」

音羽はそう言って、黙りきった。

話することが無いとでも言いたいのか。

でも、まあ・・・。

音羽がそついうんだ。安全だろう。

とりあえず、近くにあった露店で水をもらい（無料だった）、音羽が消えたと思ったら、サンドイッチを手に戻ってきた。久々の飯だ。うん。

「で、これからどうすればいいんだ？」

「逃げる。」

・・・は？

「どこへ？誰から？」

「レイフィル様の元へ。奴らから。」

淡々と、声音を変えずに音羽は語った。

・・・ああ、そうかい。

理解なんてものは、到底させてくれないんだろうな、この世界。

「...なにため息なんかついてるのよ。

こっちが何万回でもやってあげたいくらいなのに...。」

余計なお世話だ。

大体・・・死ぬといわれて、はいそうですかわかりました。なんて納得するほうが可笑しいだろ。

それを拒否するために、訳も理解もわからず、異世界と呼ばれるようなファンタジーワールドに飛ばされたんだ。
そんな俺がため息ついて何が悪い・・・。

トマトに似た味のする、”緑色”の物体がスライスされたサンドイッチを腹に納め、
再び歩き出した音羽のあとをついていく。

どこまでが現実で、どこまでが「あっち」なんだか・・・。

もうまともな脳環境も崩れてきたっばいな、こりゃ。

フツツと、声がした。

貴方八選バレタ

。

視界が・・・暗闇に切断される。
にぎやかな人々の戯言も、者を売り飛ばそうと声を張り上げている
商人たちの声も・・・
すべて、なにかに掻き消される。

…。

トゥリヴァルスヲ呼ブ為ノ生贄^{リノス}に

次の瞬間^{とき}には

暗闇が・・・血のように・・・紅に、赤に染まった。

.

八日目 赤色の夢（後書き）

もう描く気力が失われてきています…（コラ
更新が遅くなるうとも、見捨てないでください…っ（無理です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3349f/>

Tenebroso Luce

2010年10月17日08時18分発行